

『今月の天候と農作業』

通巻第5693号

11月号

令和6年10月31日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けにくいため高いでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みですが、1週目の後半頃に寒気の影響を受けるでしょう。

期間のはじめに低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は多いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率80%です。降水量は、多い確率50%です。

<1 週目の予報> 11月2日(土)～ 11月8日(金)

期間のはじめは雨の日がありますが、その後は高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 11月9日(土)～ 11月15日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 11月16日(土)～ 11月29日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆大豆

収穫と乾燥

汚損粒やカメムシ類による被害粒を減らすため、収穫前に枯れていない大豆の株や雑草を抜き取りましょう。

成熟期は、完全に落葉し、莢がカラカラと音がする頃です。コンバインでの収穫適期は、さらに10日程過ぎて、枝がポキポキと折れる時が目安です。茎の水分が高い早朝の収穫は避けましょう。

高温での乾燥は、大豆にしわや皮切れが発生するため設定温度を30℃以下にします。

◆ソバ

収穫と乾燥

バインダーや手刈りでの収穫は、子実の7～8割が黒色になった頃の朝夕に行い、10日程島立てし、子実が粉状になるまで乾燥します。

コンバインの場合は、8～9割が黒色になった頃に行い、30℃以下の温度で乾燥させます。その後、風選と粒選別機などで夾雑物を除きます。

◆麦類

1 ほ場の準備

排水良好なほ場を選び、丁寧に碎土を行います。麦は酸性土壌が苦手なため、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は10aあたり1t程度で、基肥は地区基準を参考に施用します。

2 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病の対策として種子消毒を行います。播種は、山間部では11月中旬、沿海部では同下旬から12月初め頃に行い、ほ場周囲とうね間（3～5m間隔）に溝を掘るなど、湿害対策を徹底しましょう。

（福川 泰陽）

施設野菜

◆施設野菜全般

11月末までは寒暖の差が大きいため、夕方早くに内張ビニルを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。そのため最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。

また、比較的低温で管理する作物は、夜温が下がらない場合、内張ビニルを閉める時間を遅くするなど、状況に応じた管理を行います。

◆きゅうり

促成きゅうりは、主枝から側枝の収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢を維持しながら、栄養成長と生殖成長のバランスのとれた生育をさせることが大切です。果実の着果状況に応じたかん水、施肥管理を行います。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量が多くなり、着果負担が増加するため、草勢低下に留意して適期収穫を心掛けましょう。また、草勢維持のために果実の着果状況に応じてかん水、施肥管理を行いながら、収穫が終わった懐枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培は収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水量や追肥量を調整します。また、極端に草勢低下が見られる場合は、摘果を行い、草勢維持を図りましょう。

◆いちご

日中に施設内の温度が高く、追肥の量が多い場合に、チップバーンによるがく枯れが発生しやすくなるため注意しましょう。

また、電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2.5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで1時間あたり5分間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行いましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期です。いもを貯蔵庫に入庫した後に、萌芽や結露が発生場合があります。貯蔵条件は、温度13℃、湿度90%を目標にしましょう。また、貯蔵中にいもが腐敗する場合があります。空調設備を積極的に利用すると共に、腐敗した芋は取り除きましょう。

翌年に使用する種いもは、病害が発生していないほ場から採取しましょう。

◆さといも

翌年に使用する種いもは病虫害の被害が無く、いもの形状が良い、優良な株を選びましょう。いもを貯蔵する場合は、親いもと子いもを分けずに貯蔵しましょう。また、収穫せずには場で貯蔵する場合は、低温障害を受ける恐れがあるので、マルチを除去し、培土をしましょう。

◆収穫後の片付け（かんしょ、さといも）

病害の蔓延を防止するため、収穫や種いもの採取が終わったほ場を片付けましょう。できるだけほ場外に残渣を持ち出し、ほ場に残った残渣は、耕耘等により分解を促しましょう。また、ほ場や畦畔等に残渣を放棄しないようにしましょう。病害が発生していないほ場や種いも採取ほ場に入る時は、病虫害の伝染を防ぐため、長靴や農機具を洗浄しましょう。

◆ほうれんそう

露地栽培の加工・業務用では、べと病やアブラムシ類の防除をしましょう。

◆たまねぎ

定植時期です。定植の深さは3cm程度としましょう。また、定植後の3～5日間は、かん水し活着を促しましょう。

(中村 剛)

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆ かんきつ全般

秋肥を施用する時期です。この時期の施肥が、翌年の花芽充実に有効とされています。秋肥の効果を十分に高めるためには、樹体に肥料が吸収される12℃以上の地温が必要です。これから気温や地温が低下する時期となるため、11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆ 日向夏の落果防止

日向夏は土壌の乾燥や施肥不足等により、秋から冬の落果が助長されます。落果防止剤を11～12月に散布しましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は1番果の結実不良や秋期の落果により、3番果以降の果実が結果の中心となっている園が散見されます。既に果実の肥大が十分な園では、着色に向けて昼温が高くなりすぎないように管理し、肥大が不足している園では、秋季加温を継続しましょう（昼間の温度は28℃、夜間は外気温のプラス3℃程度を目安とします）。

◆ マンゴー

早期出荷作型では花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度に抑え、夜間の最低温度は6～8℃程度を維持します。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。5割程度の出蕾を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に昇温します。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉や子房の形成不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を助長します。日中の急激な温度上昇を避けるなどの温度管理を実践し、じっくりと花芽を生長させましょう。

2 果樹園共通

冬期には防風林や防風ネットの整備を行います。防風林は、あまり密植状態にせず、適度に風が通るように枝を整理します。防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

（黒木 宏憲）

花き

◆キク

気温の低下に伴い植物体に結露しやすくなり、白さび病の発生リスクが高まります。曇雨天時は送風などを行い、結露防止に努めましょう。

年末出荷作型は摘蕾期です。花のボリュームを出すために、摘蕾作業は適期に行いましょう。

◆スイートピー

採花開始時期です。

樹勢を安定させ着花を促すため、徐々にかん水を控えるようにしましょう。

また、曇雨天後に晴天が予想される場合は、成長点や葉の焼けを防止するため、カルシウム剤の葉面散布などの対策とあわせ、必要に応じて遮光を行いましょう。

夜間の加温が必要な時期となるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始しましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を葉面散布して茎の硬化を図るとともに、収穫後は適切な前処理を行い花落ちを防止しましょう。

また、2番花のロゼットを回避するため、1番花の花穂伸長終了時から電照を開始しましょう。

◆トルコギキョウ

過剰施肥や曇雨天はブラスチングの発生要因となるため、追肥は生育状況に応じ、発蕾前に終わるようにしましょう。

一方、10月定植株は葉先枯れ症状が発生しやすい時期となります。徐々にかん水を控えて根域を広げるとともに、適宜カルシウム剤を施用しましょう。

◆ラナンキュラス

気温及び地温が低下してきます。徐々にかん水の間隔を広げ根の伸長を図りましょう。

夜間の加温が必要になるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始しましょう。

（山塚 裕美）

畜産

◆家畜防疫対策

鶏では10月26日の時点で、国内3例の家きん飼養農場における高病原性鳥インフルエンザの発生を確認しています。

また、豚熱も佐賀県において野生イノシシへの感染確認が続いています。今一度、野生鳥獣の侵入防止のために、防鳥ネットや防護柵に破れや隙間等がないか点検し、破れや隙間等があれば補修してください。

これらの法定伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒及び、野生動物の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

今月は朝晩の冷え込みが厳しい時期に入りますので、こまめにカーテンを開閉するなど、畜舎内の温湿度環境に注意しましょう。また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温機材を点検整備し、保温箱や風よけ等の寒冷対策の準備を行いましょう。

牛では、飼料作物の収穫と作付けなど農繁期となるため、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されます。朝夕の観察を徹底しましょう。

◆飼料作物

飼料用稲、トウモロコシ(二期作・遅まき)、ソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン、エン麦などの作付け時期が重なる時期です。飼養管理に影響が出ないよう計画的に作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 寒害・凍害防止対策

近年は暖冬傾向で茶樹の耐寒性の獲得が遅れる傾向にあります。耐寒性の弱い早生品種（さえみどり等）や中切りしたやぶきた等では、秋冬期の急激な低温により茶芽が凍害を受け、芽つぶれを起こす場合があるため、防霜ファンやスプリンクラーを用いた秋冬期の防霜対策を検討しましょう。

また、幼木園での敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけうね間中央に寄せるようにします。幹割れが発生した場合は、速やかに株元に土寄せを行いましょう。

2 害虫の防除

一番茶前のカンザワハダニの密度増加を抑えるためには、整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。専用ノズルを用いて、飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤の付着状況を確認しながら丁寧に散布しましょう。

また、県内の茶園ではチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。マシン油乳剤によるカンザワハダニとの同時防除を行いましょう。

（竹田 博文）

◆しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施します。クヌギやコナラの場合、葉が3～7割程度紅葉する11月中旬頃までが、伐採に適しており、樹皮の剥がれにくいほだ木となります。良いほだ木づくりのため、適期伐採を心がけます。

また、伐採後は葉枯らし乾燥を40～60日程度実施します。

2 発生操作

ほだ起こし作業は、一般的に10月～1月に行いますが、品種によって発生温度帯が異なるため、品種の特性を十分に理解して作業時期を決めます。また、ほだ起こし後に散水を必要とする品種や、水分供給を遮断して抑制を必要とする品種がありますので、使用品種の特性に合った管理を行います。

ほだ起こし作業の際、長時間直射日光に当てるとほだ木が痛むので、作業は曇天の

日か朝夕の日差しの弱い時期に行うほか、作業時には樹皮を傷つけないよう注意しましょう。

なお、風が強く吹き込むほだ場は乾燥によってしいたけの生育不良や変形を引き起こす原因ともなるため、防風ネット等を設けると良いです。

(田畑 美香)

◆たばこ

たばこの農作業の手引きについて、長年のご愛読ありがとうございました。

今後においては、宮崎県たばこ耕作組合ホームページにて、定期的に技術情報を掲載していく予定です。

(宮崎県たばこ耕作組合)

関連情報

◆農作業安全

9・10月は秋の農作業安全確認運動の期間でしたが、残念ながら10月28日までに県内で4件の農作業死亡事故が発生しました。農作業を行う際には状況に応じた危険を認識することが非常に重要です。危険に対し事前に対策を講じることで農作業事故を防止しましょう。また、農業機械の整備不良による事故の発生を防ぐため、定期的にメンテナンスを実施しましょう。

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後に、散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

◆園芸ハウスの省エネ対策

ハウスの加温時期となりました。燃料価格の高騰が続いているため、燃料使用量の削減に努めましょう。

施設園芸省エネルギー生産管理チェックシートを活用することで、燃料使用量の1

0%程度の削減が期待できます。本格的に加温を開始する前に、ハウスや暖房機の保守点検をしっかりと行い、適正な温度管理に努めましょう。

また、国の施設園芸等燃料価格高騰対策事業の補填対象期間が10月から開始されていますので、加入者の皆様は、毎月の燃料購入実績を加入先に忘れずに提出しましょう。

(農業普及技術課)

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	やや多	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入防止に努めます。
	ハスモンヨトウ	多	フェロモントラップ調査で、ハスモンヨトウの発生が多くなっていますので、早期発見と若齢期の防除に努めます。 施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。
	黄化えそ病(MYSV) ミキアザミウマ	並 並	MYSV の感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封するなど適切に処分します。
	タバココナジラミ ※	多	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するので、施設内への飛び込みを防止し増殖しないよう防除を行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病	並 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。
	ミキアザミウマ ヒスパナアザミウマ タバココナジラミ ※	並 並 やや多	いずれの害虫も、有色粘着板を設置し、早期発見に努め、低密度のうちに防除を徹底します。 アザミウマ類は、青色粘着板（300～500 枚／10a）による誘殺が、生息密度低下に有効です。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病	並 並	どちらも多湿条件下で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。また、多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバココナジラミ ※	やや多 多	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミによって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し適切に処分します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	やや多 並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。
	ハダニ類 アブラムシ類	やや少 並	いずれの害虫も、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
果樹全般	チャバネアカカメムシ ツヤアカカメムシ	—	直近 1 ヶ月の予察灯誘殺数は、チャバネアカカメムシ、ツヤアカカメムシともに平年より少ない誘殺数となっています。今後収穫を迎える園地では、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。特にハウスキンカンでは、今後ハウス内への飛び込みに注意します。
かんきつ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	やや少	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率 30%または 1 葉当り虫数 0.5～1 頭を目安に防除します。
茶	カンザワハダニ	並	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要です。この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きくなります。
<p>1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は病害虫発生予察注意報を発表予定です。</p> <p>3) 病害虫防除肥料検査センターの HP アドレスは、QR コードより閲覧してください。</p>			

